

「私をゴルフに連れてって」

2005.06.27

平成15年11月に上磯町で小児科を開業しました。保健所勤めの時には、栄養士さんにあなたの体は死の四重奏だからといわれ、家との往復を徒歩か電車で。病院勤めのときには、医局と病棟と外来の往復でとずいぶん歩いたものですが、開業したとたんに歩行量が激減。その後の顛末は皆さんのご想像の通りです。

何か体を動かすもので夏でも冬でもできるものと考えたら、歩くか走るか。走るはたぶん辛いし、膝も壊すかもしれん。歩くも、ただ黙々とでは面白くない。昨今、藍ちゃんとかさくらちゃんとか女子ゴルフがブームだし、ゴルフは歩くみたいだし、昔はこれでも高校球児の端くれだったので、止まっている球なら練習するとひょっとするとうまくなるかもしれん。大学時代、ゴルフ部の練習に行ってもまったく当たらなかった過去の記憶もだいぶ薄れたことだし・・・。

というわけで、知り合いからクラブをいただき、早速ゴルフ練習場に。一頃より男子ゴルフは下火だけど、結構たくさんいる。真ん中で打つなんて恥ずかしいので、一番隅っこでドタンバタン・・・。こんなはずだったのに、振れば意外とよく当たる。ひょっとしたら天才？こんな思いが頭をよぎる。練習を重ねるうち、そんな思いは思い以外の何物でもない現実にはぶつかる。ぜんぜん当たらない、まっすぐ飛ばない、手は痛い、右手がなぜか皮がむける。いろいろ調べると・・・、右手の皮がむけるなんて下手そのものらしい。MRの人たちに「ゴルフ始めたんだけど～～」なんて言っていた自分が情けない。何とかうまくならなければと思った矢先に、知り合いの先生がレッスンを受けるという話し。一人じゃ行きづらいけど、知り合いがいるのならと早速申し込み。そして、レッスンが始まる。

「じゃ、今まで打ってきたように球打ってみてねえ」この言葉からレッスンが始まった。恥ずかしくて見せるようなものではないが、緊張して打ってみた。「う～ん」この言葉がすべてを物語る。自己流で覚えるのは、どの世界でもよくない。最初からやり直しということである。そこから「虎の穴」のような厳しいレッスンが始まる。吹雪の日も厳寒の日も、時間があれば練習場に行きひたすら球を打つ日々。でもなかなかうまくいかない。

元スキー部の自分としては、きっと道具が悪いのだろう、いい道具を買って道具に頼るしかないという結論に達し、紹介されたゴルフショップへ。スキーは高額なものほど、経験上滑りがよくなる。エキップメントから入るのは、体育会系の悪い癖である。ゴルフクラブも高いのにどうしても目がいくが、初心者が見えるものは・・・。あとは、ショップのおじさんの言いなりである。旧モデルだけど4割引にしてあげるからと優しい言葉。FWも一緒に使うと便利だからと、FWも3本気づいたら買っていた。優しい言葉は単に商売の言葉だったようである。新しいものを持つというのはいつも嬉しいものであるが、ゴルフだけは違うようである。せっかく少しは真っ直ぐ飛ぶようになっていたのに、クラブを買え

た途端にスライスばかり。初心者にとってクラブを変えるのは振りを変えることを意味しているようだ。そこからまた修正の日々。ようやく、クラブに慣れてきたころにゴルフ場デビューが待っていたのであった。

最初に連れて行ってもらったのは、函館ゴルフ倶楽部（9ホール）という有名なところ。ここは、冬にそり滑りが出来るくらいの山岳コースで難しい。ドライバーはスライス。アイアンはトップしてなかなか前に球が進まない。やっとのことで終わったとき、ハーフで75。その次は同じコースでティーとグリーンが違って58。このあとは別のゴルフ場で18ホールを回り、123と108。人に言わせるとはじめてばかりでこの成績は素晴らしいようなので、素直に喜んでいる。

ゴルフを始めて気づいたこと、それは一人ではゴルフ場に行きづらいこと。「私をゴルフに連れてって」こんな願いを内に秘めつつ、今日もまた練習場へ。